

2025年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

夏期海外スタディツアー・ 海外ワークキャンプ

公益社団法人アジア協会アジア友の会

NPO法人グッド

認定NPO法人CFFジャパン

NPO法人アクション

認定NPO法人アクセス-共生社会をめざす地球市民の会

『水支援から地域を支え、貧困をなくす』

⇒水支援から地域の課題を解決して貧困をなくすために活動しているNGO

●主な活動内容●

- ①教育や生活の支援・環境保全
- ②緊急災害復興支援
- ③国際交流イベントの開催
- ④国内での啓発・教育活動



○主な活動地域○

インド・インドネシア・カンボジア
スリランカ・ネパール・ミャンマーなど
アジア18か国



☆今回のスタディツアーについて☆

『見たことのない世界に出会う旅

-インドの社会課題と向き合う10日間』

ポイント

- ①インドの田舎を訪れ、地元の人の暮らしや社会課題を体感
- ②経済発展から取り残される地域の実情を学び考えることが出来る
- ③より良く生きられるよう取り組むインド人による活動の現場を訪問
- ④日本の支援で作った学校で子どもたちと交流
- ⑤ヒンドゥ寺院やイスラム寺院などを観光し、インド文化にも触れる



JAFSホームページ
より抜粋

日付	旅程/プログラム	宿泊地
8/14 (木)	ムンバイ、チャトラパティ・シヴァージー空港、第2ターミナル4階、エア・インディア国内線出発カウンター前に集合 (16:45) ＜飛行機でムンバイ 19:55 発→ナグプール 21:30 着予定＞	マハラシュトラ州 ナグプール
8/15 (金)	独立記念日行事/HIV 家族支援活動視察/女性自立支援活動視察 ごみ山と周辺スラム訪問 スラムの子ども教育支援施設 チャイルド・アカデミー訪問・交流	マハラシュトラ州 ナグプール
8/16 (土)	ヒンドゥ教のお祭見学 または 観光 ＜夕方、バスでナグプール→ガッチロリへ＞	マハラシュトラ州 ガッチロリ
8/17 (日)	日印友好学園バグトラ小学校訪問・交流/植林とクリーン活動 村のお宅訪問・交流/日本から寄贈した井戸訪問	マハラシュトラ州 ガッチロリ
8/18 (月)	村の診療所 SATHI 病院視察/養鶏プロジェクト視察 ガオコール (月経中の女性の隔離小屋) 訪問	マハラシュトラ州 ガッチロリ
8/19 (火)	少額貸付 (マイクロクレジット) の RUDYA 銀行視察 ＜夜行バスでガッチロリ→ビジャプールへ＞	
8/20 (水)	＜朝、ビジャプール着＞	カルナータカ州 ビジャプール
8/21 (木)	日印友好学園コスモニケタン訪問・交流、共同活動 周辺の村で生徒の家を訪問/植林とクリーン活動	
8/22 (金)	ヒンドゥ寺院やイスラム寺院を観光 ＜夜行バスでビジャプール→ムンバイへ＞	
8/23 (土)	＜朝、ムンバイ着＞ バスターミナルにて解散 各自フライト時間まで自由行動し空港へ	-

企画団体名 テーマ（ツアー名）	公益社団法人 アジア協会アジア友の会（JAFS） 見たことない世界に出会う旅ーインドの社会問題と向き合う 10 日間ー
スケジュール	2025 年 8 月 14 日（木）～ 8 月 23 日（土）
ツアー訪問先	国名：インド共和国 地域または島：ナグプール・ガッチロリ・ビジャプール
報告者	社会学部 現代福祉学科 3 年 川口 愛心

私がインドに渡航し学んだことは、「支援のあり方」である。交通量の多さからくる環境汚染や貧富の差や女性差別など、多くの問題がインドには存在しているが、支援を行うときに気をつけなければならないことがあると強く感じた。

ビジャプールにあるコスモニケタンスクールでは、井戸から組み上げた水道水を使っていたり、ダル（豆）を生徒たちで育て、町に売り、そのお金を学校の運営費に使っていたり、かなり貧困な状況である。また、寮の寝室の環境は劣悪であった。真夏でもクーラーや扇風機はなく、非常に暑い状況であった。

そこで考えついたことは、「日本の支援で、電気を通してクーラーをつけてあげればいい」と安直に思った。しかし、コスモニケタンスクールやパダトラ小学校の生徒たちと交流した時、子供達は劣悪な環境にも関わらず、まっすぐな笑顔で私たちを迎え入れ、楽しそうに交流やダンス発表をしてくれた。

その笑顔を見た瞬間、「本当にクーラーをつけることが適切な支援だろうか」と疑問に感じた。



チャイルドアカデミーで、日本から支援物資の提供

ビジャプールで生徒のおうちに訪問し、そこで「今の生活に満足していますか？」と尋ねた際、「満足している」と答えており、日本からきた私にとっては意外で驚きのある回答だった。そこで、自然も多い地域で、都市部のようにハイテクな環境を目指していくことが、その地域の人にとって適切な支援ではないということがわかった。支援をする際には、その土地の自然や文化、生活習慣、伝統をどこまで残して、どこまで支援するべきであるのか現地に足を踏み入れ、現地の人の意見を聞き、考えて適切な支援をおこなわな

ければならないと感じた。ただ単に、日本から見たインドという視点から支援を行うことで物事を考えるのではなく、その地域の人々の立場にたって考えることが本当に意味のある支援になるということに気付かされた。現地に行かないとわからないことも多く、貴重な体験ができた。日本の「当たり前」が当たり前ではないということを学び、物事を相対化して考えられるようになった。

また、この体験を得て、女性差別の現状を知った。

今は廃止しているところも多々あるが、インドでは月経中の女性は隔離小屋（ガオコール）で隔離されることがある。その小屋を実際に拝見し、中の様子や雰囲気を経験した。せまい小屋に五人ほどが泊まったり、雨風に耐えられないような小屋だったり、かなり劣悪な環境であった。そのような背景には、伝統や宗教的な関係もあるが、教育が行き届いていないこともこのような差別が起こる原因としてあるのではないかと考えた。月経がどういうものを理解できていないのではないだろうか。

貧困な地域であると、家庭の事情で子供の頃から働かなければならないこともあり、学校にいけない子供が多く存在する。今回ツアーで訪問した二つの学校の生徒も、「仕事の手伝い」が理由で欠席していた人も少なくなかった。また、教師やインフラが不足していることもあり、教育がまだまだ行き届いていないことがわかった。

しかし、現地で活動している JAFS スタッフの方々や、教育支援に取り組む先生方とお話をする中で、少しずつではあるが変化をしていることがわかった。

たとえば、月経に関する正しい知識を子どもたちに伝えるワークショップを開催したり、女性が自らの体について話すことがタブーではなくなるような対話の場を設けたりする取り組みが始まっているという。



お祭りでのサリー体験

また、女子生徒のための衛生用品の配布や、月経期間中も安全に過ごせるようなスペースの整備など、具体的な支援も少しずつ広がっている。こうした活動は、地域の理解と協力を得ながら進める必要があり、時間はかかるものの、持続的な変化につながると感じた。

月経に対する偏見や無理解は、単なる知識の欠如だけでなく、貧困やジェンダー不平等といった社会構造の問題とも密接に関わっている。だから、教育の力が重要であり、学校教育はもちろん、地域社会全体で学び合うことが必要である。

今回の訪問を通して、現地の厳しい現実を目の当たりにすると同時に、人々の中にある「よりよい社会をつくりたい」という思いを感じることができた。私自身も、この体験をただの見学に終わらせるのではなく、今後どのように関わっていけるかを考え、行動につなげていきたいと強く感じている。

また、自分の当たり前は当たり前ではなく、環境や地域が変われば当たり前は変わるということを念頭に置き、「相手の立場に立って、本当に必要なものを提供できる」そんな人になっていきたいと思えるスタディツアーになった。

『若いうちに視野を広げ、人生を豊かに。
それが日本を、世界をよくする』

⇒ワークキャンプ等を通して、若者のきっかけ作りを支援している。



●主な活動内容●

- ①井戸掘り、道路作り等のインフラ整備
- ②日韓交流
- ③国内での農業／牧場ワークキャンプ等

○主な活動地域○

スリランカ・タイ・モンゴル
韓国・広島・長野・静岡など

☆今回のワークキャンプについて☆

『ジャングルの中の小さな村で心優しい村人たちと過ごす
最高の2週間（スリランカ）』

ポイント

- ①新しい場所で、新しい仲間と協力して作業をする中での人間的な成長
- ②現地の人との農作業や、ホームステイ等、普通の旅行では出来ない体験
- ③各国とのネットワークが充実



グッドホームページ
より抜粋

日程	活動	備考
1日目	バンダラナイケ国際空港(CMB) 18:00 集合 空港からポロンナルワ市へ移動	バス移動 研修施設泊
2日目	オリエンテーション	研修施設泊
3日目～ 12日目	村でのスケジュール ・7:00 起床／朝食 ・8:00 ボランティアワーク ・12:00-13:00 昼食／休憩 ・16:30 ワーク終了 ホームステイ(水浴び／夕食／就寝)	村での滞在期間中 は、ホームステイ
13日目	スタディートリップ(遺跡・寺院などの観光地を巡ります) 研修施設で振り返りを行います。	研修施設泊
14日目	研修施設から空港へ移動 バンダラナイケ国際空港(CMB) 17:00 解散	※帰国は翌日

企画団体名	NPO 法人グッド
テーマ（ツアー名）	スリランカ ボランティアワークキャンプ A 日程
スケジュール	2025 年 8 月 7 日（木）～ 8 月 20 日（水）
ツアー訪問先	国名：スリランカ民主社会主義共和国 地域または島：ポロンナルワ
報告者	農学部 食品栄養学科 2 年 西村 太陽

大学生になったからにはいろいろ挑戦してみようと軽い気持ちで参加したスリランカでのワークキャンプは、人生で最も大きな出来事となった。

出発前日の深夜に事務所へ着き、空港では「初めまして」が続いたが、仲間の温かさに安心した。飛行機で 9 時間を過ごし、コロンボ空港に降り立つと異国の匂いがした。長時間バスに揺られ村近くの研修施設に着くと、紙なしトイレや冷水シャワーなど衝撃的な環境が待っていた。初めて手で食べたカレーは辛すぎたが、仲間の本音の自己紹介を通じて素直に自分を出せるようになった。

村に入ると、踊り子や子どもたちの歓迎があり、本当に喜んで迎えられていると感じた。ホストファミリーは言葉が通じなくても常に寄り添ってくれ、洗濯や外出まで気遣ってくれた。夜は村でダンスパーティーがあり、日本の歌や踊りも喜ばれた。別れが近づくとアンマは涙を流し、交流会での歌では自分も感極まって泣いた。スリランカでもう一つの家族ができ、いつか必ず里帰りしたいと思った。

道づくりのワークでは、土木作業を協力して進め、効率よく役割分担できたが、途中から楽しめなくなり絶望期に入った。男子なのに頑張っていないと自分を責めたが、仲間から「太陽は頑張っていた」と声をかけられ救われた。報酬がないからこそ、自分のためにも愚痴を言い、人のために動くことの意味に気づいた。

交流会のダンス隊長としては、ソーラン節の経験を活かした。完成度を求めすぎて苦しくなったが、「楽しむことが一番」と仲間と言われて気持ちが楽になり、最終的に楽しんで披露できた。



道づくりのワークで、掘った型にセメントやメタルを混ぜたコンクリートを運んでいる様子

キャンプ後半には「個人戦」という 1 対 1 の対話を行い、まだ知らない仲間とも深い話ができ、相手を知ることでも自分も再確認でき、互いを幸せにすることが自分の幸せにつながると実感した。

このキャンプで学んだのは「愛」「豊かさ」「貧しさ」である。スリランカの人々の思いやりは偽りのない愛だった。物質的には不足していても、人とのつながりの豊かさは日本を超えていた。自然や人の表情に集中する暮らしは新鮮で、自分も目の前のことに向き合う大切さを学んだ。

一方で、水や医療の不足、家の構造、栄養状態など貧しさにも直面し、無力感を覚えた。村の中にも格差があり、将来自分にできることを考え続けたいと思った。

なんとなく海外に行こうと参加したが、多くの優しさと愛に触れ、仲間との出会いで自分を見つめ直す機会となった。これからは「目の前のことに向き合う」ことを目標に、一歩ずつ前向きに歩んでいきたい。



道づくりのワークが終わり、記念セレモニーが行われたが、そのときに日本人で集合写真を撮った

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人グッド スリランカ ワークキャンプ B 日程
スケジュール	2025 年 8 月 30 日（土）～ 9 月 12 日（金）
ツアー訪問先	国名：スリランカ民主社会主義共和国 地域または島：ポロンナルワ地区ビンボクナ村
報告者	国際学部 グローバル・スタディーズ学科 1 年 野村 未来

私はもともと海外ボランティアに興味があった。グッドが主催されているスリランカキャンプは、参加者同士の距離の近さや、村でのホームステイが特徴的である。そんなキャンプに惹かれ、何かに挑戦してみたかったこの夏、参加を決意した。

スリランカの空港からバスで村へ向かう途中、そこには目を見張るほどの大自然が広がっていた。終わりが見えない道路に大きく広がる湖、なだらかに連なる山々、壮大な空。その光景に感動した。

村に着くと村の人々が私たちを笑顔で快く迎え入れてくれた。村の子供たちが歓迎のダンスを披露してくれたりした後、ホームステイ先の発表があった。私はホームステイの経験がなかったので、どの家庭になるのか内心ドキドキしていた。私のホームステイ先は、父、母、兄、妹、犬がいる家庭だった。その村には子供が多く、ほとんどの家庭に妹や弟がいた。妹がいなかった私にとって、妹がいる生活はとても新鮮だった。

ホームステイ先の家の状況は様々だった。シャワーがなく毎日湖で体を洗う家、建設中で屋根がない家、50 羽のにわとりがいる家など。トイレとシャワーは家の庭にあり、庭には他にココナッツなどの木があった。湖にはサロンという大きな布を巻いて入る。朝や夕方になると湖ではゾウ、草原ではクジャクが見れたりした。



ホームステイ先の家族

村の道はほとんどが赤土を平らに固めたもので、中には雨でぬかるみ大きくへこんだところもあった。キャンプの一番の目的であるワーク（道路づくり）がいよいよ始まった。雨で大きくぬかるみができ、道とも言えないようなところに約 70m の道路と小さな橋をつくる。

まず、大きな倒木を移動させ、機械で草を刈る。次に、土を平らにし、水路用の溝を両脇に掘っていく。そして、いよいよセメントワーク。石と土を容器に入れ、それらをコンクリートミキサーまで運び、ミキサーに入れる。土と石の他にセメントの粉と水を入れ、出来上がったセメントを必要のところまで台車で運び、流していく。それぞれ仕事を分担し、交代しながら、みんなで力を出し合って作業を進めていった。みんなで汗を流してするワークは最高に楽しい時間だった。みんなで一つものを作り上げたとき、達成感と同時に私たちの絆がより一層深くなっていると感じた。



（左）ワーク前の道

（右）完成した道路

一日のワークが終わり、家へ帰るとティー（紅茶）タイムがあり、美味しい紅茶とお菓子を毎日出してくれました。その後は夕焼けが美しい大きな湖に行き、みんなで水浴びをしたり、カラオケ・ダンスをして楽しんだ。早朝、ホームステイ先の家族が野生のゾウや大草原にある鳥の巣を見せに連れていってくれたり、牛の搾乳も体験させてくれた。

お別れパーティーでは日本とスリランカで交互に歌や踊りなどを披露し、中には日本人とスリランカ人が一緒に歌って踊ったものもあった。

村を離れ、有名な観光スポットのディンブラガラにバスで向かった。ディンブラガラは大きな岩の山で神聖な場所となっている。頂上ではスリランカの大自然を一望できた。頂上でする個人戦（メンバーが話したい人を指名し、約 30 分間 1 対 1 でお互い感じていることなどを話すというグッドの昔からの交流方法）は一生忘れないであろう貴重な時間となった。

日本に帰る最終日、ミーティングをし、一日個人戦の時間が設けられた。そこで自分を見つめ直したり、これからどう過ごしていきたいかを考えることができた。何をどう感じ、どんな悩みを抱えているかなど、普段ならしないような会話も沢山した。人が考えること、感じることは様々で、共感することもあれば、刺激を受けることもあった。

このスリランカワークキャンプを通して自分自身の変化をすごく感じた。このキャンプに参加する前は周りと合わせる生活で、自分に自信を持てず、人と比べ、周りを気にする暮らしに生きづらさを感じ、自分らしさを見失っていた。そこで、少しでも自分を変えるきっかけになればいいなと思いを持ってキャンプに参加した。私が変わったことはまず、楽観的になったこと。また、周りを気にしなくなったこと。思い切って行動に移せることが増えた。このキャンプ中はありのままの私で居れた。そのことから少し自信を持てるようになり、ありのままの自分で人と接することができるようになった。ありのままの姿がどう思われようとも、私を愛してくれる海の向こうにいる家族、真剣に話を聞いて私を受け止めてくれるキャンプメンバーがいる。だから大丈夫。そう思うと何でもできるような気がした。

今回のキャンプに参加し、現地の人々にとって長年の夢だった道路をつくるという成果を残すことができて嬉しかった。また、人と繋がるってこんなに楽しいんだと気づくことができた。

一人ひとりと深く関わったことで、自分には持っていなかった考え方や自分とは違った物事の見方を得ることができた。

これからは、今回の一歩を次の一歩へと繋ぎ、新たな出会い、新しい価値観に触れ、私の中にある世界をどんどん広げていきたいと考えている。



『子どもたちと一緒にお互いの可能性を伸ばしていきたい。

夢や希望を信じたい。そして心から笑いたい。同じ人間として共に幸せに生きたい。』

⇒国内・海外問わず子どもの未来を築くために活動。それが自身や世界の未来を築くことになる。

●主な活動内容●

- ①海外ボランティアと子ども支援
- ②学校・教育に関する活動
- ③地域（世田谷区）での活動

○主な活動地域○

フィリピン・マレーシア
ミャンマー・東京等



☆今回のスタディツアー／ワークキャンプについて☆

(A) 『マレーシアスタディツアー』

- 5つの角度の"平和"からマレーシアを読み解く』

(B) 『マレーシアワークキャンプ』

- マレーシアの大自然から子どもたちの未来を築く』

ポイント (A)

- ①様々な角度から平和を考える
- ②他宗教・他民族・多文化に触れる
- ③ホームビジット体験

ポイント (B)

- ①子どもの家関連施設の修繕・整備ワーク
- ②戦争体験者の話を聴くピースセミナー
- ③サステナブルな施設を知る



CFFジャパンホームページより抜粋

(A)マレーシアスタディツアー

毎日違う場所を訪れる8日間

1日目

第1日目の午後、マレーシア・コタキナバルのホテルに集合
(リーダーと同じ便でも渡航できます)

スタディツアー開始！

貧困地域や福祉施設、戦争記念碑等、毎日違う訪問地を訪れ現地のことを学びます。

ホームビジット

ホームビジット（現地家庭に宿泊、生活の体験と交流のプログラム）では、いくつかのグループに分かれて、現地の人の家庭に2回滞在します。

交流

現地の子どもたちと遊んだり、村の人々と交流します。

シェアリング

毎晩、参加者同士でその日のテーマに沿った話をする時間を持ちます。

8日目

第8日目、解散。
(リーダーと同じ便でも帰れます)

(B)マレーシアワークキャンプ

マレーシアの青年とともに！

1日目

第1日目の午後、マレーシア・コタキナバルのホテルに集合
(リーダーと同じ便でも渡航できます)

ミニ
スタディツアー

貧困地域やごみ集積場で生活する人々、戦争記念碑等を訪問し現地のことを学びます。

子どもの家
に到着

マレーシアの青年（現地キャンパー）と初対面！

ワーク

現地キャンパーとともにワーク。参加者自らが考え、体を動かします。みんなで協力する建設作業が中心です。

セミナー

戦争と平和、自分自身、社会などについてセミナーを行います。

10日目

第10日目、解散。
(リーダーと同じ便でも帰れます)

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人 CFF ジャパン 第 74 回マレーシアワークキャンプ
スケジュール	2025 年 8 月 8 日（金）～ 8 月 17 日（日）
ツアー訪問先	国名：マレーシア 地域または島：コタキナバル
報告者	国際学部 国際文化学科 2 年 田中 大也

まずこのマレーシアワークキャンプでは、活動のメインとしてその地域の技術をより発展させることを目的とし、私たち MWC (マレーシアワークキャンプ) 74 期生も電気を使う現代機器を使用せず、実際に自分たちの体を動かして活動した。また、この MWC の目的は単なる地域の発展ではなく、子供たちとの触れ合いや私たちの会話や意見交換の大切さを理解してもらう為でもあるのだ。年齢層は 28 歳から高校 2 年生までと幅広く、その中で私たちが問題解決に至るまで話し合いや試行錯誤を繰り返す事で力を身につけていくことも重要である。本レポートでは私がこの意見交換等で感じたことを大きく 3 つに分けて紹介する。

1. 私たちの生活水準の高さ

私たちは普段生活していて当たり前のようにエアコンや洗濯、シャワーや風呂また食料品の調達を行っているが、この場所ではそのような機能は存在しない。また、携帯電話は使えるが電波が届かないので使えず充電も出来ない。洗濯は手洗い、シャワーは出るが冷水であり水不足であれば近くの川で体を洗う。また、食料品はこの土地で採れた食材と家畜から頂いているなど、全ての事柄が互いの協力成り立っている。この生活を続けていて感じたことはやはり私たちの生活水準の高さである。しかしながら、日本でも言える事だが、誰かが働いているお陰で私達が普段当たり前だと思っている生活が送れていることに改めて気付くことが出来た。

2. 周囲の人々の能力の高さ

私はこれまで、高校生の時や大学生になった今も特に凄い何かをした経験がなかったが、メンバーの中には高校生のうちに留学経験があり英語を流暢に喋ることが出来る人がいたり、大学院に進んで自分の夢を叶える為に行動している人や、まだ高校生だが必ず最初に行動する人など周囲の能力の高さが自身の学びに刺激され、如何に自分がこれまで墮落した生活を送ってきたのだろうかということを鑑みる機会を得た。お陰で自身の新たな向上心が引き出された。

3. 達成する力

この MWC では、外で活動する期間はとても短くほぼ一週間程度しかなく、雨でその作業が中断になってしまうことも多かった。その中でどのようにすれば効率よく作業することが出来るか、75 期生にどのような形で繋げることが出来るかなど様々な事柄を毎晩 1 時間程度話し合い、結果的に写真の通り残りを 75 期

生に繋いで貰う形となったが、予定よりも早く完成することが出来た為その分子供たちとたくさん遊ぶ機会が増えた。この成果も毎日の話し合いや全員で共有し役割分担をした結果が結びついたのだろう。



全員で昼食を取っている時の写真

4. 最後に

私はこのマレーシアワークキャンプに参加してとても新しい発見や経験を得られたと感じる。普段の生活ではできないような経験や身の回りのことに感謝することが出来るようになった。特に携帯電話を使えないということはとても良い生活様式だとも感じた。携帯電話を使わない事で口頭でのコミュニケーションが増え、目の前に広がる自然や景色をより一層楽しめたと思う。また、ワークだけではなく子供たちと一緒にサッカーやバレーボールをして遊ぶことが何よりの楽しみになっていた。もし仮に来年も参加できるとしたら迷わずに来るだろう。今回の活動ではこの地域の発展だけでなく、私にとっても貴重な経験であり、この機会をきっかけにこれからもっと積極的に様々な活動に取り組んでいきたい。



腐ったバナナの木を撤去している写真

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人 CFF ジャパン 第 75 回マレーシアワークキャンプ
スケジュール	2025 年 8 月 24 日（日）～ 9 月 2 日（火）
ツアー訪問先	国名：マレーシア 地域または島：コタキナバル
報告者	政策学部 政策学科 2 年 栗原 輝紀

このボランティアは私の価値観を変えました。元々夏に何かしたいと思い、様々な動機があった訳でもなく漠然とマレーシアに行きたかったので申し込み、正直たった 2 週間弱で何がわかるんだとずっと思っていました。

しかし実際に現地に着くと、毎日を必死に楽しく生きている子供たちを目の前にすると、自分自身の無力さや日々の生活の怠惰さに気付かされるばかりでした。まだ物心もついていないような子供たちや思春期の子供たちなど沢山いましたが、みんなが無条件に私たちを愛してくれました。会う度に笑顔で駆け寄ってきて、疲れた時でも眠たそうでも自分の元へ来てくれて、日本語を必死で勉強しようとしていたり私と一緒に趣味を共有したりしてくれました。また、みんな歌が好きで、なんで知ってるの？と思わせてくれるような日本の有名な曲を知っていたり歌ってくれたりしました。みんなが笑顔でひとつの家族のようなあたたかさを感じ、愛があれば家族のような存在になれるんだと心から思いました。



第 75 回のポーズをし、ワークの最終日に
全員で撮った写真

ワークキャンプでは干害を防ぐための貯水施設を作りました。急斜面で立つことさえしんどく、穴を掘るのに丸 2 日かかったりとハードな作業でしたが、子供達がこの先ここで水に困らずに生活するために、あの子たちの笑顔を守るためだと考えると作業は楽しくなりました。キャンパー同士声をかけあって、ときには大声で叫びあって鼓舞しあって楽しく熱意をもって取り組むことが出来ました。

この地域であった過去の歴史を学ぶピースセミナーや自分たちだったらどう思うかなど精神面でも学ぶ機会が多く、毎日夜にみんなで考える時間がありました。学校の友達と話すにはあまりにも深く、なかなか

か口に出しにくい話も沢山ありましたが、全員が全力で真剣にひとつの課題に向き合っていて取り組めたので、みんな心を開いて気を遣わずに話せました。泣きながら子供たちの気持ちに寄り添う場面も多く、本音でぶつかっていくことが出来ました。このキャンプの一番よかった点だと私は強く思います。

また、この旅で学んだことは、人を信じること、人生の主人公は自分なんだから他の人の意見は参考程度でいいという事です。同じキャンパーの中に 8 カ国貧困地域をまわり肌で感じてきた人がいました。その人が得た価値観などを寝る前にみんなで聞く機会がこのキャンプでは何回もありました。その人のセリフです。私はこの話で今まで他人に合わせる事で生きてきた人生を見つめ直すきっかけになりました。そしてこれからはやりたいことを行動力を持ってやり遂げると決めました。

このように私はしんどい事も辛いことも海の向こうに出来た親友たちと共に乗り越えていける自信に繋がりました。このような経験をさせていただいたことに感謝しています。



現地の子供たちと遊ぶシーン



ダムを完成させた時に撮った写真

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人 CFF ジャパン 第 26 回マレーシアスタディーキャンプツアー
スケジュール	2025 年 9 月 7 日（日）～ 9 月 14 日（日）
ツアー訪問先	国名：マレーシア 地域または島：コタキナバル
報告者	経営学部 経営学科 1 年 松尾 みはな

まず初めに、障害者福祉施設に訪問しました。そこでは様々な障害を抱えている利用者の方々や職員の方々と共に暮らしている施設で、私はそこで職員の方がおっしゃった「私たちが一方的に何かを与えるのではなく彼らと生活して必要とされた時に支援する、彼らのニーズに応えることをポリシーとしています」という言葉に感銘を受けました。私が今まで思い描いていた障害者福祉施設のイメージとは違い、共に暮らすといったことを重きに置いており、利用者さんが自分でできることは自分の力でやってもらう。職員と利用者という関係よりは同じ 1 人の人間として対等に接していると感じました。また、利用者の方々の得意を活かした職業訓練を行っており、その成果に応じた賃金も支払われていました。それぞれの個性を活かし単なる福祉施設ではなく可能性を広げる場であるという風に感じられました。

その後、ムスリムの方々が礼拝に来るモスクに訪問しました。そこで正式な礼拝の服装に着替えて見学しました。中には現地の子供たちがたくさんいて話を聞いてみると、モスクの上に小学校の教室があり、放課後は友達と一緒にモスクへ礼拝に来ると言っていました。小学校の頃から自分の日常生活の中に宗教が身近にあるというのが日本と大きく違うところだなと感じました。

2 日目に無国籍の人々が暮らすスラムを訪れました。そこではほかの東南アジアの国（主にフィリピン共和国）から亡命してきた人びとがくらししており、3,4 世代にもわたってその場所で子供が生まれているため、そこで生まれた子供は親の国籍も、マレーシアの国籍も得ることができず必然的に無国籍となってしまうと説明を受けました。そのような過酷な状況に置かれているにもかかわらず、現地の子供たちは突然訪問した私たち日本人の学生たちを温かく迎え入れてくれ、無邪気な笑顔を見せてくれました。

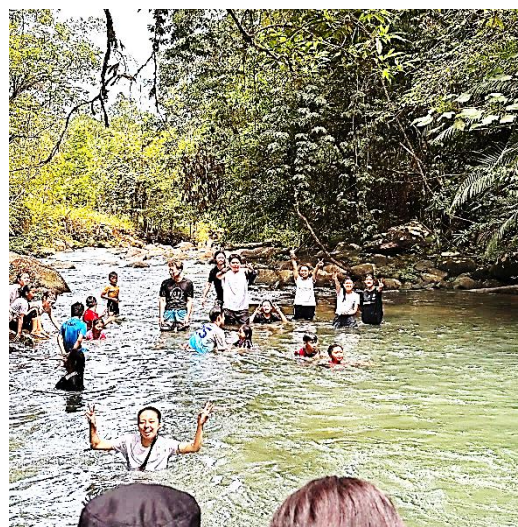


無国籍集落の様子

このようなスラム街で暮らす人々を支援している現地の NGO 団体の職員の方の話によると、この無国籍の人々が暮らすスラム街は私たちが訪れたところの他にも数多くあり、人口もどんどん増えてきているため、根本的な解決は現実的ではないとおっしゃっていました。

その後、2 日間 CFFM（CFF マレーシア）が運営する「子供の家」で過ごしました。そこでは家庭環境（虐待や育児放棄）により家族と共に生活することが難しい子どもたちが、学校に通いながら共同生活をしていました。CFFM では地域のボランティアの力を借りながら、学力の遅れを取り戻すための塾を開いたり、バイオリンの習得といった情操教育も行なっていたり、寄付に頼る施設ではなく自給自足で資源を賄っていくサステナブルな施設作りを目指していました。

最後の 2 日間は村に訪れてそこでホームステイをし、マレーシアの村の生活を体験しました。お風呂が桶から水浴びであったり、トイレは自分で水を汲んで流す方式であったりと、日本の生活とは 180 度異なる暮らしを体験することができました。



ホームステイの村の人々と川に遊びに行った様子

全体の活動を通して、今まで観光目的で行っていた海外とは違い、現地の暮らしや社会問題を肌で感じることができました。自分の知らない世界がこの地球にはまだまだあるのだなと思いました。私たちが日本に帰ったからといって、そこで起こっている社会問題はまだその場所で起こっていることなので、他人事として考えないようにしていかなければいけないと考えます。

『生まれた環境に関わらず、世界の子ども達が
自分のチカラで夢や可能性を広げることができる、やさしい社会をつくる』



⇒どんな環境で生きていても、こども達一人ひとりが、持つ力を発揮し、夢にむかって、おもいきりチャレンジできる世界を。

●主な活動内容●

フィリピン

- ①職業訓練・教育・ケア活動
- ②児童養護施設職員教育
- ③性教育プロジェクト等

日本

- ①学習支援
- ②国際理解教育等

○主な活動地域○

フィリピン・日本



☆今回のスタディツアーについて☆

『フィリピンの貧困地域でホームステイ &
孤児院滞在スタディツアー』

ポイント

- ①貧困についての丁寧な講義とサポート
- ②貧困地域訪問 & ホームステイ
- ③孤児院に滞在、こどもと交流

アクションホームページ
より抜粋



1日目	12:30 羽田空港集合／15:05 羽田空港発（PR421便） 18:45 マニラ空港着／専用車でオロンガポのホテルへ移動 【食事】朝：×、昼：×、夜：機内	ホテル泊
2日目	午前：オリエンテーション（滞在中の注意事項など） 午後：フィリピンの貧困問題に関するレクチャー 夕方：ローカルマーケット散策 【食事】朝：×、昼：×、夜：×	ホテル泊
3日目	終日：貧困地域の一般家庭でホームステイ 【食事】朝：○、昼：○、夜：○	ホームステイ
4日目	午前：ゴミ拾いで生計を立てる人々が暮らす地域訪問・昼食 午後：ホームステイ先で自由時間 【食事】朝：○、昼：○、夜：○	ホームステイ
5日目	午前：ホストファミリーとお別れ／JICA海外協力隊員と交流 午後：ホームステイの振り返り／ショッピングモール散策 【食事】朝：○、昼：×、夜：×	ホテル泊
6日目	午前：孤児院に移動 午後：孤児院でボランティア活動(施設の掃除や職員のお手伝いなど) 夕方：孤児院のこども達と交流 【食事】朝：×、昼：○、夜：○	孤児院泊
7日目	午前：アクションが給食支援を実施している公立小学校訪問、給食試食 午後：参加者同士でツアー全体の振り返り 【食事】朝：○、昼：○、夜：○	孤児院泊
8日目	午前：マニラへ移動 午後：アクション代表による講義、ショッピングモール散策 【食事】朝：○、昼：×、夜：×	ホテル泊
9日目	朝：マニラ空港へ移動、帰国 08:05 マニラ空港発 / 13:40羽田空港着(フィリピン航空PR422便) 【食事】朝：機内、昼：×、夜：×	

企画団体名 テーマ（ツアー名）	NPO 法人アクション フィリピンの貧困地域でホームステイ&孤児院滞在スタディツアー
スケジュール	2025 年 8 月 7 日（木）～ 8 月 15 日（金）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：オロンガボ・マニラ
報告者	先端理工学部 電子情報通信課程 2 年 久保 大輝

私は、自分の価値観を広げて、より多様な意見を受け入れられる柔軟性を身に着けたいと思い、このフィリピンスタディツアーに参加することを決意した。このスタディツアーでは 9 日間にかけて、貧困地域でのホームステイ・孤児院滞在・地域散策などを通じた学びを得た。その中でも特に印象に残ったのは、「日本でのチャレンジできる環境を無駄にしたくない」という思いである。

現在のフィリピンは、世界的に見て貧困層の多い国である。その理由として、日本でいう財閥解体や農地改革などの格差を縮めるための政策が取られなかったことや、建設業や製造業などの多くの雇用を生む第二次産業を飛ばして発展したため、雇用不足になってしまったことなどが考えられるだろう。



マニラにある水上スラムに訪問したときの写真

実際にフィリピンに行ってみてやはり貧困問題は非常に目についた。例えば、物価は日本と比べ $1/2$ とやや安いのにに対して、給料は $1/10$ と大幅に少なく、生活を維持する大変さは日本とは比べ物にならない。それ以外にもフィリピンではお米が異常に安く、フィリピン人のお米の消費量は日本人の 3 倍にも上るといふ。そのせいか、スラム街を歩いてもふくよかな人が多く見られた。

フィリピンの教育に対する問題点も実際に行ってみていくつか分かった。フィリピンでは 13 年間授業料は無償で教育を受けられる。だが、払わなくて良いものは授業料のみでそれ以外の教材や制服などは自費で補わなくてはならない。また、教育施設の少なさ、及び教員不足も問題点である。フィリピン人は日本と違い 0～14 歳が全体の人口の内 30%を占めている。

それらを収容できる施設及び人材は到底用意できないので、私が赴いた小学校では午前・午後の二部制が導入されている。それによって、教育に割ける時間も少なくなり、全体的な教育の質も悪くなってしまうのだろうと私は考えた。

フィリピンで最も強く感じたのは、日本と比べて格差が目に見えるほど大きいということである。マニラ中心部の高層ビル群から一歩外に出ると、すぐそこにスラム街が乱立しており、貧富の差が顕著に表れていた。それに対し、日本にも格差は存在するが、ここまで極端に生活水準に格差は感じられない。改めて、日本が比較的安定した環境を維持していると感じた。また、生活の質という点でも大きな違いを感じた。特に印象的だったのは、トイレトペーパーをトイレに流せなかったことである。衛生面や快適さの基準は国によって異なることを肌で理解し、当たり前だと思っていた日本での生活が非常に恵まれたものであると気づかされた。こうした体験を通じて、私は日本に生まれて、教育や生活環境が整った中で何度も自由に挑戦できることがいかに幸運であるかを強く実感した。

今回のスタディツアーを通じて、私は「挑戦できる環境が整っていること」への感謝を強く持つようになった。特に、貧困地域で出会った子どもたちは、決して恵まれた環境にはいないにもかかわらず、純真に笑いかけ、私たちと一緒に遊んでくれた。その姿は今も忘れられない。そんな子供たちを思い出した際に、自分がいかに恵まれた環境に生きているかを再確認し、挑戦することを躊躇してはいけないと感じる。日本に住む私たちは、教育や生活環境が整っている中で、失敗を恐れずに新しいことに挑戦できる。今回の学びを大切に、私はこれからも挑戦を重ね、自分自身を成長させたい。



ホームステイ先の近所に住んでいる子供と遊んでいるときのツーショット

『子どもに教育、女性に仕事を』



⇒ 貧しい人々の生活状態を改善すると同時に、人々自身が貧困から抜け出すための問題解決能力を身につけられるよう支援を行っている。

● 主な活動内容 ●

- ① 子ども教育支援事業
- ② フェアトレード事業
(女性や若者の就労支援)
- ③ 日本での啓発活動

○ 主な活動地域 ○
フィリピン・日本



☆ 今回のスタディツアーについて ☆

『フィリピンスタディツアー』

飛び込もう。「途上国」のリアルを体験する旅へ」

ポイント

- ①じっくりお話「家庭訪問&インタビュー」
- ②「子どもの権利」ワークショップを体験
- ③戦後を生き抜いた人々の声を聴く



アクセスホームページより抜粋

		日 程 (予 定)	宿泊先
1日目		【マニラ空港で合流】 ワクワドキドキのツアースタート！ 参加者やスタッフと顔合わせ、オリエンテーション	Park Vil-la Apartelle泊 ケソン市内
2日目	3つの都市スラムで 貧困のリアルに触れる	【都市スラム訪問1】 東南アジア最大のスラム「トンド地区」を訪問 コミュニティ内を歩いて見学、家庭訪問で住民の声を聴く 子どもたちと交流、感想シェア	
3日目		【都市スラム訪問2】 子どもの権利を学ぶワークショップ体験 トンド地区にある貧困層向けの集合住宅を訪問 家庭訪問で住民の声を聴く、感想シェア	
4日目		【都市スラム訪問3】 見上げるほどの巨大なゴミ捨て場の周辺にできたスラムを訪問 コミュニティ内を歩いて見学、小学校で子どもたちと交流 家庭訪問で住民の声を聴く、感想シェア	
5日目	多面的に フィリピンを 理解する	【戦争と歴史】 戦跡を訪問、太平洋戦争でご家族が被害を受けた方からお話を聴く 感想シェア	
6日目		【フィリピンの大学生との交流】 大学生と交流、ショッピングモールで自由行動、ディスカッション	
7日目		【マニラ空港にて解散】 別れを惜しみつつ…！	

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定 NPO 法人アクセス共生社会をめざす地球市民の会 フィリピンスタディツアー
スケジュール	2025 年 8 月 29 日（金）～ 9 月 4 日（木）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：トンド地区、パヤタス地区
報告者	社会学部 社会学科 4 年 中村 こむぎ

一言でこのツアーの感想を伝えるなら、このツアーは私の人生の中で最も刺激的だったということです。何かに飛び込むことが非常に苦手で色々なことを避けてきた私にとって、参加は非常に大きな挑戦でした。

特に印象に残ったことが 2 つあります。

1 つ目はスラム街の現実です。今回のツアーでは 3 か所のスラム街に行きました。事前にスラム街ではゴミでできた山ができる程の環境であることを学んでいたのですが、実際に行くと想像を大きく超えていました。道がゴミで溢れ、ゴミを踏まずに歩くことが難しいくらいでした。このような場所は日本で考えられないことだったので衝撃的でした。この環境で生活できるかと問われたら、私は無理だと思ってしまいました。この環境下で生きるしかないということに残酷さを感じました。その一方で、そこに住む人々は笑顔で出迎えてくれ、話しかけてくれる子や元気に走り回っている子供たちも沢山いました。私が持っていたスラムのイメージは空気がどんよりとしていて、住む人々も怖いのではないかというものでしたが、実際には全く違ったのです。どんな環境でも笑顔を忘れないところに力強さを感じ、私自身が彼らから力をもらいました。



パヤタス地区で出会った家庭

2 つ目は日本が第二次世界大戦中にフィリピンで行った戦争加害についてです。私たちは日本の戦争加害を学ぶために日本軍の拷問センターとして使用されたサンチャゴ要塞に行きました。ここでは日本兵による残虐な暴力が行われていました。環境の悪い地下に閉じ込め、地上から日本兵は食べたチキンの骨などを落とし、それを地下にいる人々が食べていたといいます。

またフィリピンはスペインに 300 年、アメリカに 50 年、そして日本に 3 年半の間統治されてきましたが、その間に亡くなったフィリピン人の数はほとんど

同じだったと聞きました。日本に統治されていた時期の恐ろしさを感じ、心が苦しくなりました。そして戦後、戦争によってできた瓦礫を集めたことが、スラム街で問題となっているゴミ山の起源になっているのです。

ここからもわかるように現在のフィリピンのスラム街の問題と日本の戦争加害の歴史は地続きになっていました。これらを学び、自分が全く知らなかったことを恥ずかしく思うと同時に、この歴史を知ることには日本人にとって避けては通れないものだ強く感じました。日本では戦争加害の歴史を学ぶ機会がほとんどありません。私も今回のツアーに参加していなければフィリピンでの日本の戦争加害について知ることはなかったのではないかと思います。日本は戦争加害の歴史をどう後世に伝えていくかを検討しなければなりません。私ができることは、まず自分で戦争加害の歴史について調べ、今回のようにその土地へ実際に行くことです。少しずつでも実行していきます。

今回のツアーで、過去の歴史を学ぶことが今を生きる私たちの姿勢を変えるのではないかと感じました。過去というのは過ぎ去ったものではなく、現在も姿を見せないだけで消えていないものなのではないでしょうか。特に戦争加害の歴史はその土地で根強く残ったままになっていると感じました。この問題に日本はこれから向き合わなければならないと思います。現在、SNS により何かを考えることを避ける傾向がありますが、私はこの経験を通して、問題と向き合い、考え続けることが重要であるということを学びました。問いを持ち続け、考えることを止めないようにしたいです。



人々が囚われていたサンチャゴ要塞地下の様子

企画団体名 テーマ（ツアー名）	認定 NPO 法人アクセス共生社会をめざす地球市民の会 フィリピン・スタディツアー
スケジュール	2025 年 8 月 29 日（金）～ 9 月 4 日（木）
ツアー訪問先	国名：フィリピン共和国 地域または島：マニラ
報告者	国際学部 国際文化学科 4 年 山口 京夏

「自分は小さく、虚しい。」

フィリピンの貧困問題は、想像を遥かに越えた複雑な実態の上に成り立っており、自分の無知、解決への無力さに何度も悔しさを抱いた旅であった。本稿では、ツアー中に視野を根本から変える契機となった 3 つの気づきを述べる。

① 「スラムの人々は美しかった」

貧困と幸せは別ベクトル

マニラ最大級のスラム街トンド地区を訪れて間もなく、それまでに抱いていたスラムに対するネガティブな偏見が一機に消滅した。人々は、我々と目が合うと必ず微笑み歓迎し、子供達は明るく挨拶をした後ハイタッチを交わし、拙い英語で話しかけてきた。彼らは好奇心旺盛で、純粋で愛らしく、より子供らしいと思える存在であった。「幸せを感じる瞬間」について住人へ問いかけた際には、「家族で食事をする時」「学校を卒業した時」との声があり、スラムに住む人々は、我々が当たり前として盲目であった小さな幸せをよく理解し、前向きに生きているようであった。この経験により、“貧困＝不幸”ではなく、幸せの多様な形に改めて気付かされた。フィリピン人は、自然災害や侵略の歴史に耐え忍んできた強靱さや忍耐性から“竹”と象徴されているが、貧困に直面しながらも明るく生きる彼らはまさに竹であり、美しさを感じた。



クイーニー（Queennee）との一枚
パヤタス地区都市スラム訪問、
小学生へ日本文化を伝えるレッスン中

② 貧困の原因となる敵はあまりにも大きい

フィリピンの貧困の要因は、既に富を持つ政府や上流層に握られていた。例えば、政府による汚職、また

血縁で繋がる政治家の存在は、貧困問題を停滞させている要因の一つである。また、不公平な土地所有制度、政府や一部の富裕層による都市開発や鉱山開発は、住民の強制的な立ち退きを生み出し貧困へと陥れ、多くの外国資本を投入する政策は、最終的に国内への利益を逃がし、貧困解決のための予算貯蓄を阻んでいる。

さらに、雇用の機会を増加したとしても、教育を受けていない貧困層は職に就くことすらできない。

このように、国を動かす力のあるものが貧困問題の根本について理解不足であり、欲のままに上ばかりを見て、下を持ち上げていく意識に欠けている、この行き過ぎた富の偏りが、貧困解決における最大の敵なのではないかと考える。

③ 二度による日本のフィリピン征服

最後に、フィリピンを知るツアーを通し、意外にも日本の過去を知る必要性に気付いた。第二次世界大戦中、日本が罪の無いフィリピン人を大量虐殺したという事実を、どれほどの日本国民が知っているだろうか？日本はフィリピンを占領し、3年間で約 100 万人のフィリピン人を虐殺した。その多数の犠牲者は民間人で、酷い拷問や日本兵による嫌がらせによって苦しめられたのだ。



サンチャゴ要塞訪問
この地下で、日本兵が 600 人の
フィリピン人を拷問、殺害

戦争を生き延び、家族を日本兵によって失ったフィリピン人の Titoさんは、日本は“2度”に渡りフィリピン征服を遂げたと言及した。1次は戦時中の軍事的な征服、2次はODAや日本企業の進出による経済的な征服である。日本のODAやNPO団体がフィリピンへの援助を通じ、経済進出と日本国の名誉挽回を成し遂げているに過ぎないという新しい見方も、感慨深いものであった。

これらの事実を知った際、日本の悪事を隠蔽する腐敗した日本教育に怒りを覚えると共に、同じく日本による被害を知らないフィリピンの若者達が、親日的な態度を見せることに対し、素直に喜べなくなっていた。日本がフィリピンを2度に渡り征服し、未だにその影響がフィリピンの貧困に根付いていることは、日本国民全員が知るべき事実であると考えます。そして、日本は戦争の被害者であり、加害者でもあることを認識し、まずは自国についての歴史を改めて理解することが、他国を含む今後の悲劇を繰り返さないためにすべきことであると気付いた。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261